

自筆資料に見る南方熊楠…………… 26

「鼠に関する民俗と信念」

文／敷島書房店主 一條 宣好

南方熊楠の代表作ともいわれる「十二支考」。執筆されなかった「牛」を除く11編の中で、2020年の干支に当たる子年の論考「鼠に関する民俗と信念」(〔原稿0868])の原稿60枚は、ふたつの点で特殊な存在と言える。「十二支考」の中で雑誌『太陽』に掲載されなかった唯一の論考であり、「十二支考」で唯一現存する直筆原稿でもあるからだ。

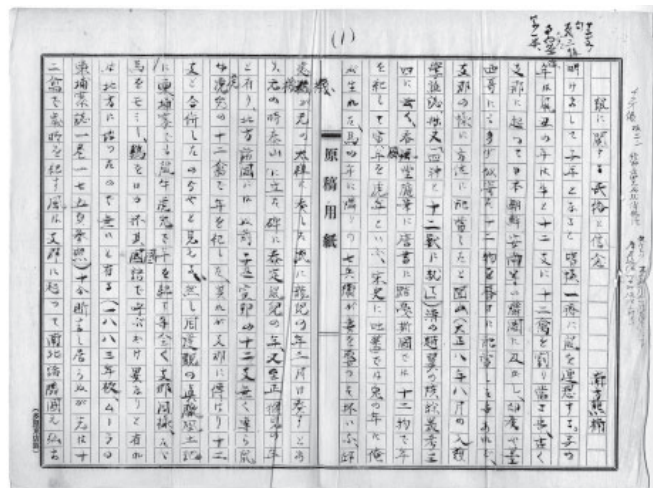
1923(大正12)年の日記を参照すると11月19日の記述に「『太陽』へ『鼠に関する民俗と信念』二葉かく」とあり、この日に執筆が開始されたとみられる。12月3日には「五十五葉と十一行まで」書き進め、『太陽』を発行している博文館編集部へ既にできていた30枚を書留で発送した。12月10日に脱稿、翌11日には残り30枚と挿画5点「(一) 梵相大黒天 (二) 今日印度のガネサ (三) パーガンデー王夢に橋として渡りし剣 (四) ハムステル (五) 竹鮑」に「状一」を添え、書留で発送している。

しかし12月21日、予想外の出来事が起こる。『太陽』編集部の長谷川誠也という人物から「鼠に関する民俗と信念」の掲載を断る旨の手紙が届き(〔来簡3356〕長谷川誠也・封書)、別便で原稿60枚が返送されてきてしまった(挿画5点は返却されなかったらしく現在確認できない)。長谷川の書簡には、既に一月号の編集が終了していること、編集部の新しい方針により雑誌の内容を「通俗的」に改めることにしたため熊楠の原稿は誌面に合致しないことなどが、非掲載の理由として挙げられている。

以上の事情で「鼠に関する民俗と信念」60枚は、熊楠の生前には発表されることなく終わってしまった(乾元社版、平凡社版の全集ではそれぞれ異なる変更が施されており、どちらも熊楠が書き上げた当初の内容そのままではない)。熊楠にとっては不幸な出来事だったが、資料保存の見地からすれば、返送されたために「十二支考」で唯一残った幸運な原稿とも表現できるだろう。

興味深いのは、『太陽』への執筆と同時進行で大阪毎日新聞に掲載された「鼠に関する伝説と文学」(乾元社版、平凡社版全集では副題をとって「鼠一疋持って大に富んだ話」になっている)が書かれていることである。12月13日の日記には「四時より大毎紙へ鼠の話筆す。徹暁不眠」とあり、14日の分には「昨夜不眠。今日おし通し大毎紙へ原稿かく。四百八十字罫紙八葉半、午後四時成り、下女して出さしむ」と書かれている。19日には原稿料50円を受領した。博文館の長谷川からの封書と返却原稿を受け取ったのは21日なので、大阪毎日新聞への執筆は非掲載になったことと無関係である。新聞社から依頼を受けて執筆したものが、あるいは自発的に投稿したのか、該当する記述を見いだせていない。今後日記や周辺の資料を精査して事情を確認したい。

この「鼠に関する民俗と信念」については、1924(大正13)年に中村古峡からの「十二支考」刊行打診を受けて開始された新規書き下ろしの草稿など、関連する直筆の原稿類が計6点顕彰館に所蔵されている。白浜の南方熊楠記念館には「鼠」の腹稿も現存する。「十二支考」の論考で、これほど多数の関連資料が遺されているものは他にない。熊楠の思考の軌跡を追うための貴重な資料群と言えよう。今後の研究の進捗が期待される。



鼠に関する民俗と信念・原稿〔原稿0868〕

CONTENTS

第30回南方熊楠賞 受賞者決まる	…2
講演「闘雞神社について」 長澤 好晃	…3
講演「南方熊楠が書き留めた田辺祭」 向村 九音	…9
異界と熊楠 橋爪 博幸	…12
リヴァプール到着 岩淵 幸喜	…16
第43回南方を訪ねて報告記 長瀬 稚春	…18
南方熊楠と同級生たち 郷間 秀夫	…20
書簡の杜(二十二) 岸本 昌也	…22
新資料紹介 田村 義也	…24
「熊楠」生物覚え書 29 土永 知子	…26
熊楠メモランダム 大和 茂之	…28
南方熊楠研究会 年次大会開催について	…29
〔追悼〕飯倉照平先生	…30
吉川 壽洋 小峯 和明 木之内 誠 池田 宏 畔上 直樹	
書評・書籍紹介 石井 正己	…34